

編集後記

燈火親しむよい時候となつた。これからは患者が段々減るシーズンであるので、開業医家や病院経営の面からは最良の時ではないかも知れないが、各地にいろいろな學會も開かれ、研究や讀書には大いに拍車のかかる秋である。

この秋に相應しく本號はなかなか多彩な誌面となつた。前號のあとをうけて、「臨床醫よりみた日米病院管理」座談會は愈佳境に入り、年來の問題である病院と看護婦の質の問題を始め、手術場と外來、レ線や臨床検査法等の在り方、病院に於ける基礎的研究の問題等前回より通して現在我が國の病院が直面している問題を總ざらえした感がある。非常に發言が活潑なために尻切とんぼで意を盡し得ない所もないではないが、時間の割にはよくもあんなに喋つたものだ、あとで感久しい次第であつた。味讀して頂ければ幸いである。次に、前號で一寸ふれていた懸案のベッドの問題と眞向から取組む座談會をベッド・メーカーと試みたので御紹介することとした。我が國では、直接診療に關係の深い醫療器械については、これを使う側とメーカーの間に氣心が通じあつて逐次改善のあとがうかがえるが、所謂調度品ということになるとレディーメードで間に合せるという習慣がある。これは畢竟後者については製作上の註文が餘らないということで、結局關心が薄いということになるのかも知れない。ベッドやマットレスは寧ろ醫療器械に屬すべきものだと思われるが、こういった患者の身の廻りのものについてもつと病院關係者の目が向けられ、看護婦等が働き易い様に、患者の居心地がよい様にされてこそ、病院機能がよりよく發揮されるのであろう。本誌では今後こうした方面の開拓をも一層心がけたいと思つている。

個々の論文については、本名先生の病院の根本問題についての忌憚ない批判は主として病院開設

者に對する頂門の一簣であろうし、關根先生の綜合病院の精神科病室は新しい病院の在り方として是非一考を要する處、小酒井氏の中央検査室とインターンの教育は検査室中央化に伴う一連の問題、吉田氏等のハウスキーパーの任務は細い表をあげて克明に説明されているが、ハウスキーパーの病院組織に於ける地位とその人を得る點が問題となる處であらう。入院業務乃至醫事業務については、從來主として國立病院のものについてのみ紹介されているが、他の系統の病院についても伺いたいものである。

新しい試みとして、本號より本誌にもテーブルコーダーを備えることとした。折にふれ時にふれ思付いたことや新しいアイデアを忘れぬ様に吹込んでおこう、という譯である。その中には夢もあらう。創意工夫もあらう。よい思付もあるのであらうが、それらがいつか芽をふき、實を結ぶものもあるであらう。よいものは誌友で育て上げてみるのも面白からう。こゝ當分アナウンサーを守屋氏に願ひ、適宜役者交替して相勤めましようという次第。飛入りも歓迎します。

文部省と厚生省の合作になる大學病院改善委員會では、來年度の豫算編成を目途として大學病院の建築様式につき鋭意審議を續けていたが、モデル建築をするためには先ず病院機構問題を先に片づけなければならないというのでかなり畫期的な構想が行われているときく。まことに耳よりの話である。本誌上でも屢々論じられた如く、大學病院の在り方が我が國病院問題のガンであつた譯だが、この明るいニュースは前途に光明を與えてくれる氣がする。

昨年7月以來、ガリオア留學生として米國加州大學に於て病院管理學を研究中であつた研修所の島内氏が8月末歸朝された。追々本誌上にうんちくを傾けて頂けると思う。(小西)

— 表紙説明 —

寫眞はベッドのスプリング

マットレスを除いてベッドのスプリング機能を明にしたところ。左端の把手つきの操作は重心安定のために使われる。特殊裝置をほどこしたベッドの1例である。